

# JICA開発教育コラム VOL.5

2022年度

開発教育オンラインセミナー総集編

## 教室と世界をつなぐヒント

JICA開発教育コラム 2022年度 2月号 発行：JICA地球ひろば

今年度から始まったJICA地球ひろばの開発教育オンラインセミナー。全6回を通じて多彩なゲストをお迎えし、「教室と世界をつなぐヒント」を様々な視点でお届けしてきました。今回は総集編として、特別に各回で出てきた「ヒント」を少しずつお伝えします！

### 第1回 世界を知る「探究の問いづくり」のヒント(6月18日)

講師：山藤 旅間(さんとう りよぶん)氏

新渡戸文化中学校・高等学校 副校長(学校デザイナー・生物教諭)



①好きを問う→問い続ける ②ポジティブな選択肢の提示  
身近にある「問い」を丁寧に出し続けること

“プロジェクト型学習において私たちが大切にしていることは、生徒一人ひとりの「好き」を問うことです。一人ひとり対して「何が好きなのか」、「なぜ好きなのか」、「その好きで誰を笑顔にできるか」を問い、さらに次の行動を考える段階でも、誘導するのではなく「次はどうするの？」と、こちらから問いを投げかけ続けるようにしています。生徒それぞれが世界を変容させていく、その担い手になることを目指すためには、授業が終わったあとも活動を継続したり、広げていって欲しいと思います。なので、生徒自身の「好き」から始めることが大切なのです。教員が問いを投げ続けて、生徒は自分なりの手法を探り、取り組む経験を繰り返すことで、私たちの手を離れた後も、自ら問いをつくって行動しながら自律していく。そうあって欲しいと考えています。また「こんなイベントがあるよ」「こんなデータもあるよ」と、教員がポジティブな助言をし続けることも大事だと考えています。”



当日は、生徒の取組事例や、その時どのような問いを生徒に投げかけていたかもお話いただきました。生徒が自分の「好き」から人を巻き込んでいくストーリーには、参加者からも「感動した」というコメントが寄せられました！

▶ 概要や講師プロフィールは[こちら](#)(第1回特設サイト) ◀

### 第2回 「多文化共生の文化」を学校(教室)につくるヒント(7月30日)

講師：海老原 周子(えびはら しゅうこ)氏

JICA国際協力推進員(外国人材・多文化共生)



聞く力・つながる力・頼る力で「共に創る」

“これまで関わってきた外国につながる子ども達からよく聞く困りごとは、「友達がなかなかできない」「相談する相手がない」ということです。そのため定時制高校や地域での居場所づくりを実施してきました。継続していく中で子どもたちに変化が見られ、「友達ができた」「ここにいると素の自分でいられる」という安心感を伝えてくれる子どもが多くなりました。そのような安心感を作っていく際に工夫していたことは、次のとおりです。

- ①子どもたちの強みを見つけ、活躍の場を与えること。
- ②子どもたちの得意なことを活かす場を与えること。
- ③ルーツから入らず、好きなこと・関心のあることから子ども同士をつなげること。

また、私たち自身も「今こういうことに困ってるんだけど、こんな人を探してるんだけど、何かアイデアない？」など、とにかく自分が感じている困りごとやニーズについて周りに尋ね、外部の団体とつながっていくと良いと思います。「多文化共生の文化」は一人で全て完璧にはできないけれど、お互いの強みを活かして共につくっていくものなのではないかと思っています。”



当日はサブゲストとして特別支援学校で教員を勤める森裕紀子さんから、特別支援教育の観点から多様性・多文化を尊重するための取組をお話いただき、海老原さんとの対談も実施しました。

▶ 概要や講師プロフィールは[こちら](#)(第2回特設サイト) ◀

尾木ママが登場した第3回セミナーの様子は次のページ

JICA 地球ひろば

## 第3回 児童・生徒が自ら世界とつながるヒント (8月8日)



講師：尾木 直樹(おぎ なおき)氏  
教育評論家／法政大学名誉教授

子どもへのリスペクトを持ち、  
アクティブラーニングで「生き延びる力」を育む

“OECDのEducation2030というプロジェクトチームが2030年に子どもたちに身につけておいて欲しい能力として提言しているのは「生き延びる力」です。これを構成している3つの要素のうち、まず1つ目は「新しい価値を創出する力」。暗記した答えではなく、全く新しいものを創出する力です。2つ目は「対立やジレンマの調整力」。例えば地球環境や政治経済などの複雑な問題とどう向き合い解決していくのか、武力による衝突ではない方法を模索する力です。3つ目は「責任ある行動をとる力」、自分を客観視する力とも言えますね。この3つを「生き延びる力」と定義したんです。AIの発達と共存を念頭にした提言でしたが、コロナ禍の時代になって、どう生き延びていけるかがより問われてきているなどと思います。ICTが学校現場にも普及した今、子どもたちには世界の情報をつかんで、それを自分だけで考えるんじゃなくて友達とも議論する、といったアプローチをしてほしいですね。”



参加者からの『生き延びる力の3要素について、学校現場での具体的な事例は？』との質問に、尾木先生は次のように回答されました。

“A. 学力が高いと言われるフィンランドでは「ミクシィ？」＝「どうして？なぜ？」っていう発想を、保育園から大学院まで大事にしています。僕が実際に視察した保育園では、“水”というテーマに対して子どもたちが「水が嫌い」とか「すっきりする」「冷たい」「飲みたい」とか自由に発言するんです。そうするとその度に先生あるいは友達が、「ミクシィ？(どうして?)」って聞くんですよ。そして発言した子供はそれにちゃんと答えるんですね。「プールで溺れそうになったから水が嫌い」と。なぜ？と問われるかもしれない、という思いを持って発表するんです。そういう場合には批判的思考力(クリティカルシンキング)を使いますが、日本では人の事を批判するのを嫌がる傾向がありますよね。でも悪く言うのではなくて、さらに前進しようという意図がある批判的思考力を保育園から育てるんです。大学でもやります。そうすると、そこでちゃんと答える表現力と、発想力も身に付くんですね。必要な学力の要素が同時に身につく構造が、フィンランドではできているんです。”

▶▶ 概要や講師プロフィールは[こちら](#)(第3回特設サイト) ◀◀

## 第4回 校外学習で世界とつながるヒント (10月22日)

講師：佐藤 秀樹(さとう ひでき)氏 JICA地球ひろば 総括主任  
津山 直樹(つやま なおき)氏 東京外国語大学 非常勤講師

五感を使って気づき・学び  
「正しさ」から自由になり理解を深める

## ■ 佐藤氏：

“JICA地球ひろばは、「地球案内人」と呼ばれるJICA海外協力隊の経験者が展示を案内する施設です。例えば教育のブースには忠実に再現されたブルキナファソの教室があります。机の上にノートがなく、小さい黒板が置かれているのを見て、現地の子どもたちが板書を写して家に持ち帰り勉強することができないことを理解するのです。またJICA海外協力隊は、途上国という違う文化を持つ土地で、自分が「やるべき」と思うことに取り組みます。ところがそれが現地で正しいと認識されることは多くありません。協力隊員は、そのような場面で悩み、葛藤を抱えます。その葛藤の経験から、来場者の学びにつながることを考えたり、問いかけたりしながらガイドができるのです。答えのない問いを考えることが求められる今、そのきっかけの「場」としてぜひ地球ひろばを活用していただきたいですね。”



## ■ 津山氏：

“さまざまな学びの場において、私たちは、これからの「持続可能な社会」のような複雑な事象について、先進国や発展途上国の立場という自分の考え方に近い文脈(「正しい」と思っていること)で学びがちです。しかし、このような学びは、ひとつの見方や考え方にすぎません。「正しいとされるもの」や、自分が「正しいと思っていたこと」から自由になり、深く理解していただくことが重要です。その方法のひとつとして、校外学習によって児童生徒一人ひとりの「感性」を引き出すことが大切です。正解と不正解、優劣がない児童生徒一人ひとりの「五感や直観」にもとづく学びが、「正しさ」を溶かしていくひとつのヒントになるのではないのでしょうか。”



当日は佐藤氏、津山氏によるワークショップのほか、地球案内人の方からも、海外協力隊員のときに現地で感じた葛藤を共有いただきました！

▶▶ 概要や講師プロフィールは[こちら](#)(第4回特設サイト) ◀◀

## 第5回 学校と企業をつないで世界を広げていくヒント (11月26日)

講師：岩岡 寛人(いわおか ひろと)氏  
鎌倉市教育長



**教育委員会が企業と連携し資金調達する仕組みで、教育と社会がつながるきっかけに！**

“変化のスピードが速い社会の中で、20年後、30年後の未来を見通した教育として、プログラミングやSDGs、グローバル、PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)、アントレプレナーシップ、特別支援などのテーマに社会的要請が高まっていく中で、そのリソースが与えられていない、というのが学校現場の実態ではないかと思います。これをどのように乗り越えるか、と考えたのが「鎌倉スクールコラボファンド」の原点です。

社会を見渡すとこのようなテーマに関する様々なリソースがありますが、学校が外部と連携しようと考えたとき、企業の方に手伝ってもらうためには資金が必要です。無償でやってくれる企業があっても、学校側が綿密に準備して受け入れないと相手に対して申し訳ないと感じるのは、やはり無償であり、対等な契約関係ではないからだと思います。この壁を打破して、**当たり前のように連携し協働するためには、これを持続可能にしていくための資金源や仕組みが必要**だと感じ、教育委員会の下に「鎌倉スクールコラボファンド」という資金源を作りました。

教育委員会自体で資金調達する、**教育を社会に開くためには、ただ「やりたいこと」をやるのではなく、社会からの期待や要請に応じて、その証を持って教育活動に取り組むことが必要**です。そのため資金を集める際には、ふるさと納税の仕組みを使って、教育委員会がクラウドファンディングを行いました。この仕組みを取り入れることによって、「良い教育をしてほしい」という学校に対する個人の願いを、そのまま自分の住民税の支払い先として指定することができます。そうすれば、学校もさらに頑張っていて、社会の要請に応じて教育活動を行うようになります。この仕組みによってそういうインセンティブサイクルが生まれ、また他の市町でもアレンジして展開ができるようにしていきたいと考えています。”



岩岡さんのお話の後には、鎌倉市立西鎌倉小学校の川坂先生から、実際に行った企業連携による授業やプロジェクトについて、その経緯や活動を通じた児童たちの気づきや学びを紹介いただきました。

▶ 概要や講師プロフィールは[こちら](#)(第5回特設サイト) ◀

## 第6回 好奇心で世界とつながるヒント (2023年1月21日)

講師：高橋 歩(たかはし あゆむ)氏 作家・自由人



**出会いをサボらないこと！  
先生のワクワクが児童生徒に伝播していく**

“子どもの頃、夕飯のときに母親が必ず「今日何か楽しいことあった？いいことあった？」と質問をしてきて、自分はそれに答えなきゃいけないから、生活しながら自然に楽しいことを探してた。あと、例えば10人くらいで野球とかサッカーして遊んでると、悪気はないんだけど下手な奴を端っこの方にやっちゃったりする。そんな時に、母親が質問の流れで「今日はみんな楽しそうにしてた？どんな顔してた？」って聞くんだよ。そうすると「みんな楽しいわけじゃなかったかもしれない」と思ってくる。だから考える。それで、野球が苦手な子が輝ける「セミ捕り」など、違う遊びを始めてみたり。**そうして毎日母親からの質問に答えることで、自分の中で「ワクワクセンサー」が育ったと思う。**それからもうひとつのきっかけは、マザー・テレサを学校の授業で知ったこと。先生が、そこだけ熱量高く語ってたんだよね。**結局記憶に残るのって、話してくれたその人のその思いの強さ**だと思う。今自分がやっている環境活動で、ボランティアしたっていう若い人に「きっかけは何だったの？」って聞くと、意外と学校の授業って言う人は多いよ。キーになるのは、先生本人が、その人とか国とかに個人的に思い入れがあったり好きだったり、そういう熱が入ってることだと思う。自分の人生を振り返ると、出会いが人生をつくってきたんだなって思う。それも予期せぬときに何気なく出会った人。だから**この先もより楽しい人生になっていくためには、出会いをサボらないこと。自分を開いて出会っていく姿勢が大事なんじゃないかって思う。自分が好きなこととかワクワク、好奇心みたいなものと世界をつなげていけばいいんだと思う。**”



セミナーでは、歩さん自身のお子さんとの向き合い方や、気持ちが落ち込んだ時にどのように考えているかなど、様々なエピソードもお話いただきました。

▶ 概要や講師プロフィールは[こちら](#)(第6回特設サイト) ◀

一人ひとりへの「問い」によって子どもの心が動き、気づきが生まれる。そして外部との連携によって、インクルーシブで持続可能な学びの機会をつくる。全6回のセミナーからこんなヒントをいただけたように思います。総集編では伝えきれない魅力の詰まった開発教育オンラインセミナーに、2023年度もぜひご参加ください！